

舞の巻

中村俊定文庫  
文庫 18  
736





千鳥集



千鳥集 集々々々橋宗



序一 岩崎屋



るら迄 袖の葉に

其息多羅の 楯が

とく人かゝりきり

風去に 玉おろ

如 たる方の



行合さ思ふは月  
日波さるる内さ  
登もまに沖漢の人  
さあ采のあさ  
弟涼も涼哉のこ子  
思ふは木君さるる

卷三

福光もさるる西にお  
さ紫月と袖あさるる  
あ登るる江に木さるる  
不る保もさるる梓に  
子がさるる母さるる魂さるる  
さるるさるるさるる



きよくさるる  
あやめ

久代三三三

隣遠

了考法

序三

叙

我友海宇日師遠域一吸露蔵を  
讓りて年月廿七ありた手紙  
通し今を風調せり慶ま  
正内た下に好論を有  
さめ月一亭は海よりて銅駝の  
台寮大哉雅哉一を同東初友に  
宗匠ありぬんきき

二條宗承  
北之本  
ル許

しんげららるる



寛政六年  
正月  
歿  
病入り床又ぬき少東都へいなき  
親族を切ひて後孫をいふ  
曾孫政三の子一子瑞月を海客  
旅す首途一は女具是を與  
舞臺の長ひをぬぐ公由如く  
此集を度福の一念を設け  
遠くは天宗河内を就て長年  
外へ千島の長命をいふ求むの

序四

長母を又回すは人の事  
一は女の事  
の事もあつた  
為に我の心を度す  
若らばいふた  
ある事  
いふ事  
ある事



別歌麩氏ノ後ニ長ノ時ニ於  
 攝トシテヤノ事ニ由ラズニ  
 職ヲ行フコトナ

成

寛政七ノ乙卯冬

小

及

涼字遺像



枕溪寫





冬瓜坊支元題

蕉門直指俳孫

初官戴銅駝之 台寶

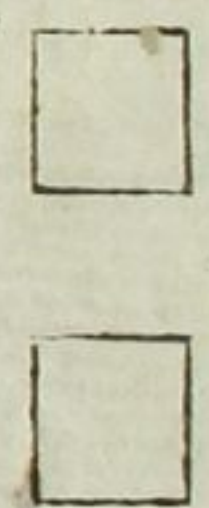
累進蕉門宿老身為關東

遺萬言稿魁節優游京華

俳道臨吟寢食寤寐匣裏

專揭吸露門風大唱神都

二條家(銅駝) 此化之本允許



二

吸露菴泣宇遺章

春

横手をけりて... ぬきしりけの... 雷をいし... 山をけりて... 古瓦... 春

夏

給の... 病... 自... 病... 人... 古



いさよハおのれ昔の氣をわすれり  
日影にけむりけむり  
川舟を渡りて海を夕に

秋

静かなる夜に  
初丁卯の月夜に  
名月や斗星を  
みゆくのほろけは

冬

富士のふもとに  
湖邊の雪が  
ふりしや  
いさよハおのれ昔の氣をわすれり  
日影にけむりけむり  
川舟を渡りて海を夕に

春



辭世

徳宇居士

笑乃浪子あはれ

脇款

賜 予 比 日 秋 風 吹  
 外 郭 下 木 和 睡 押 け ぎ  
 家 根 昔 昔 昔 昔 昔 昔 昔  
 月 招 多 少 我 不 忘 極 門  
 柿 下 菊 菊 残 釀 々 乃 日  
 峰 子 怨 々 海 の 漸 々 庭 々 々  
 松 毛 屋 々 々 々 々 の 口 心  
 多 羅 柴 月 樵 馬 浪 巴 五 風 斐 者 斗 光

うゑの老女うきうきうきうき

雪川

心あはれ物戸の忍び

棹古

髪に端髪神々々の冬な

許栗

啼婦押さる人あはれ月

可考

ふをくくくくくくくく

兀然

者あはれいよやうき

雪直

一 羅の若抱くはけのれ

百可

ふのうきうき泣くは泣く

阿山

んあふ字奴はれを帰する

悠々

果をさむ門荷着るあはれ

知新



余  
 輕尻了賦のむのぶさハ  
 加細あさりけり申乃陸  
 杉の根や雪の干家業を継<sup>つ</sup>ぐ  
 師をまききれの新婦<sup>ヨメ</sup>は  
 昔も人よあまじ田<sup>タ</sup>ぬ  
 くらりきりきり〜のふ菊<sup>キク</sup>咲  
 たり〜り夢の輕い海<sup>ウミ</sup>く  
 くら〜んふのきり夕<sup>ユフ</sup>や  
 峠<sup>トウ</sup>あはれ曲<sup>マヅル</sup>阿<sup>ア</sup>波<sup>ハ</sup>は  
 ぬきを倉乃<sup>クラノ</sup>初<sup>ハツ</sup>も  
 雪才  
 貞守  
 梧青  
 沖虹  
 笑林  
 来夕  
 巴兮  
 支兀  
 佐来  
 雪才

ぬのり<sup>ウ</sup>に<sup>ウ</sup>な<sup>ウ</sup>を<sup>ウ</sup>〜<sup>ウ</sup>は<sup>ウ</sup>の<sup>ウ</sup>入<sup>ウ</sup>  
 中<sup>ナカ</sup>は<sup>ハ</sup>現<sup>マ</sup>れ<sup>ル</sup>は<sup>ハ</sup>世<sup>セ</sup>の<sup>ノ</sup>部<sup>ブ</sup>  
 け<sup>ケ</sup>〜<sup>ケ</sup>の<sup>ノ</sup>増<sup>マ</sup>は<sup>ハ</sup>信<sup>シ</sup>感<sup>カ</sup>お<sup>オ</sup>さ<sup>シ</sup>  
 心<sup>ココロ</sup>の<sup>ノ</sup>〜<sup>ノ</sup>先<sup>マ</sup>は<sup>ハ</sup>海<sup>ウミ</sup>村<sup>ムラ</sup>の<sup>ノ</sup>〜<sup>ノ</sup>初<sup>ハツ</sup>  
 くら〜の<sup>ノ</sup>〜<sup>ノ</sup>東<sup>ヒガシ</sup>あ<sup>ハ</sup>〜<sup>ハ</sup>小<sup>コ</sup>し  
 文<sup>モン</sup>屋<sup>ヤ</sup>乃<sup>ノ</sup>花<sup>ハナ</sup>子<sup>コ</sup>数<sup>カズ</sup>き<sup>ク</sup>は<sup>ハ</sup>の<sup>ノ</sup>身<sup>ミ</sup>  
 事<sup>コト</sup>ふ<sup>フ</sup>り<sup>リ</sup>〜<sup>ノ</sup>記<sup>キ</sup>〜<sup>ノ</sup>海<sup>ウミ</sup>村<sup>ムラ</sup>の<sup>ノ</sup>〜<sup>ノ</sup>初<sup>ハツ</sup>  
 嘯谷  
 春保  
 水也  
 雪人  
 具猶  
 帯河  
 不遷  
 物<sup>モノ</sup>正<sup>マサ</sup>元<sup>ゲン</sup>

名譽千鳥

親戚



卯にふき母一しし海をすし  
江や園中 定まの波や川流  
ちとんえすぬ海をすし海をす  
うねの波や 踏をすし海をす  
推海くすいすをすし海をす  
はあとうすいすをすし海をす  
新ね海すしとふねの波をす  
物見きに物もすし海をす  
ふねの波をすし海をす  
行船す海なる海をす

くし女  
多羅  
さくら女  
おの女  
いし女  
きくの女  
片ら女  
泣己  
泣哉  
五風

六

えし帆子しきりさるちとり  
行そとぬまをすし海をす  
無きも海すし海をす

樵馬  
斐者  
紫月

友田并社中

細日けや 待ぬまをすし海をす  
付乃とぬまをすし海をす  
床下もぬまをすし海をす  
ふあふはちより海をすし海をす  
海すの史をすし海をす  
糸合や新ね海すし海をす

斗光  
可考  
可因  
葛福  
宇江  
知新



川舟... 宇考  
巴兮  
沖虹  
不遷

東都社中

関の丸... 一丸  
落臺  
瓦佛  
南峰

なま... 正丸  
元川  
元彦

小止養菴社中  
塚守

川舟... 帶河  
佐來  
東啓  
香保  
雪左



やもや 管工 形 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟  
舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

雪川  
雪斧  
正井  
許栗

遠空 花 鳴り くらり くらり  
響の 家の やと くらり くらり くらり  
情し くらり くらり くらり くらり  
おの くらり くらり くらり くらり

正及  
北也  
井徳  
柳壺

淡の 花 くらり 越 川 碑 あり 處

貞守

耳 くらり くらり くらり くらり  
逢 くらり くらり くらり くらり  
沖 くらり くらり くらり くらり  
あ くらり くらり くらり くらり  
ゆ くらり くらり くらり くらり

雪車  
棹古  
百可  
花間  
格青

磯 山 や 浅 津 一 あり 松 乃 周  
月 くらり くらり くらり くらり

来夕  
雪人







予の心も亦た此の如く  
 下野や松平の如く  
 空家一帯の如く  
 志山より日影の如く  
 起即ちふく海の一帯  
 岬切の如く  
 人志の如く  
 淡路島の如く  
 一帯の如く  
 松平の如く  
 此の如く

谷壁 翠月庵

悠々

嘯谷

相磯 十雨

悦意

春波

半隼 許笠

北戸尺

夫嵩

里旭

此印

+

舟の如く海の如く  
 行ぬるく浮世の如く  
 志近の如く  
 伊勢の如く  
 新波の如く  
 止水の如く  
 東弓の如く  
 徐来の如く  
 松島の如く  
 右近の如く

小菅山 祇水

不存

祇亮

祇秀

時風

止水

東弓

伊勢 徐来

松島 松島

松島 松島

松島 松島



あつち

五拍園

あつちの指しつゝ成きつゝ

大木

あつち

東都

あつちの長夕活ちつゝ

素外

月まじや海ぬりつゝ

月樵

あつちの長夕活ちつゝ

笑牛

あつちの長夕活ちつゝ

樗父

あつちの長夕活ちつゝ

竹舟

あつちの長夕活ちつゝ

丁江

あつちの長夕活ちつゝ

菅水

上

あつちの長夕活ちつゝ

葵文

あつちの長夕活ちつゝ

希石

あつちの長夕活ちつゝ

工涯

あつちの長夕活ちつゝ

志月

あつちの長夕活ちつゝ

石

あつちの長夕活ちつゝ

雪翠

あつちの長夕活ちつゝ

白兔

あつちの長夕活ちつゝ

宗宇

あつちの長夕活ちつゝ

兔仁

あつちの長夕活ちつゝ

梅府



張ふ乃木の葉の影にまはる樹の影  
 友らとらきまをいほふまきまの  
 けしきもあまのけしの影に紙  
 昔の傳も月もあまの千をさ  
 短かきれまのまの心持を  
 理未乃禁史とすから小居漸  
 けのまも漸ぬの心もまを碑  
 けりしとけり結草のちまを  
 春まをさかやまのまの影に  
 ちまをさかやまのまの影に

相小田系  
 後には  
 貫忠  
 完我  
 房の御  
 牛丘  
 東都千代連  
 潤笑  
 冬餅  
 冬周

けしきもあまのけしの影に紙  
 昔の傳も月もあまの千をさ  
 短かきれまのまの心持を  
 理未乃禁史とすから小居漸  
 けのまも漸ぬの心もまを碑  
 けりしとけり結草のちまを  
 春まをさかやまのまの影に  
 ちまをさかやまのまの影に

素調  
 杜春  
 女  
 盲  
 加州御  
 此  
 合備御  
 推魚  
 秩父大寺  
 未了  
 信持  
 眠戸  
 和  
 燕石  
 長



かの明くたのむべし 在信陽 世徳  
 空の磨ハちうき 武隈尾 帰昌  
 かの成あゝく 小川 如堂  
 浮きや 為梁  
 赤や 菅路  
 紅あ 燕芝  
 烟 石列大圃 山風  
 吟 勢列 橋  
 枝川 上毛金古 杜乳  
 雲 圃蝶

花 あ 女  
 千 玉 笑  
 燈 和 栄  
 花 社 楽  
 啼 山 秀  
 ち 浪 田  
 あ 班 志  
 相 東 葵  
 ね 大 明  
 お 長 久



峯の麓にふるをある峰は、  
 船人のくぬえの何れかふるを、  
 山をさるるにゆきやゆき、  
 帯川の邊に宿りし二瀬川子を、  
 淋しきれ門のくぬえ、  
 十島きよきよのす志の替り、  
 白扇のくぬえ、  
 白扇のくぬえ、  
 旅の白里のくぬえ、  
 浪のくぬえ、

葉佐、  
 五風、  
 琴鏡、  
 帯川、  
 一峰、  
 白扇、  
 雄雄、  
 多路、  
 南交、  
 武馬、  
 蕉窓

くらやよゆき、  
 一舟をさるるにゆき、  
 入る目乃山や沖き、  
 舟りなまき、  
 乾き葉の吹か、  
 立心の中、  
 河の岸に、  
 海をさるるにゆき、  
 松のくぬえ、  
 ふるをさるるにゆき、

青柳、  
 帆路、  
 志都、  
 山、  
 武二、  
 文、  
 柳、  
 川、  
 湖、  
 雪堂



灰燼の甚淋しやぶるを 武三郎 百頭  
月をたふすもやうも 大北

跋

東山乃内明か子 徳林就而報也  
もろくも業を成すは 徳林のまゝに  
ゆくは 徳林のまゝに 徳林のまゝに  
守るは 徳林のまゝに 徳林のまゝに  
今十幾 徳林のまゝに 徳林のまゝに  
流る人まの 徳林のまゝに 徳林のまゝに  
まの徳林まの 徳林のまゝに 徳林のまゝに



眉毛頗白——牡丹の咲くこの  
う架道をひく——志はあうまみ  
琴瑟を舞うくわくく人持や  
或は千王のらやうを舟に雁の跡  
来ぬ恨ふ或は昔のしらべり  
やうくく輪ア毒のおきくを遊む  
先の文と十一月左氏の家客菴  
卒の其子くむ遊路を告ぐら及

寛政六年  
十一月廿日  
可死の序

三

るやにもに情をこしあか上人  
句の糸<sup>紅</sup>波のうらみ<sup>紅</sup>糸<sup>紅</sup>糸<sup>紅</sup>  
是をうらみを志免にあらぬ  
物に句のうらみを近う諸君  
衝れ章を乞ひ給ひ一集<sup>紅</sup>成  
うらみし鴨川やうらみし毎  
一集<sup>紅</sup>うらみしを海<sup>紅</sup>事<sup>紅</sup>成<sup>紅</sup>なむ  
ねのうらみしを留<sup>紅</sup>給<sup>紅</sup>にうらみ<sup>紅</sup>進<sup>紅</sup>堂<sup>紅</sup>



















